

「ガラクタを拾う男」

華
凛

【あらすじ】

小学五年生の小森翔太（二）は夏休みに両親の仕事の都合で伯父日々野竜一（40）の家に預けられる。竜一は、去年までニューヨークにいたが今年に入って、日本に帰ってきていた。

毎日、毎日、海辺に出てはガラクタを拾ってきて、倉庫の一角に積み上げていく竜一。翔太はそんな竜一をいぶかしげに見つめながら、自分もガラクタを拾う。

ある日、竜一は翔太をゲイバーへ連れていく。そこで出会う人たちは皆、一癖も二癖もあり、翔太はまるで夜の動物園みたいだと思ふ。でもそんな人たちが生い立ちに葛藤を抱えながらも、夢や志を持って、懸命に生きていることを知る。

夏休みが終わりに近づくと、翔太は日に日に、元気がなくなっていく。竜一がどうしたのかと尋ねると、翔太は、学校でいじめられていることを竜一に打ち明ける。

竜一は自分がガラクタを集めている理由を話し始める。竜一の言葉にハッとした翔太。翔太は、夏休みの宿題が一つ残っているから手伝ってくれと言う。

始業式を迎え、翔太は竜一に手伝ってもらった工作を持って学校に行く。それは一見すると、ただガラクタを積み上げただけの代物だった。いじめっ子の太郎（二）が翔太の工作を叩き落して壊してしまう。放課後、泣きながら工作进行す翔太。数日が過ぎ、降り続いていた雨が止んだその時、一人の児童が教室の後ろを見て指をさす。そこには、陽の光が翔太の工作进行を照らし、後ろの黒板に影を作り出していた。その影はまさに象の形をくつきりと映し出していたのだ。

一方、竜一の倉庫では、暗がりの中にギャラリ―が集まっていた。竜一が照明のスイッチを入れていくと、倉庫の壁に次々と動物たちが影となって表れていた。それはまさに「夜の動物園」だった。

【人物関係表】

小森翔太（11）小柄で少し気弱な小学五年生。
学校でいじめられている。（21）美大生。

日々野竜一（40）翔太の伯父。汚い恰好をしてガラクタを拾ってばかりいる。

小森大地（36）翔太の父。建築家。麻衣と事務所を設立。

小森麻衣（36）翔太の母。竜一の妹。建築家。
大地の妻であり共同経営者でもある

春子（56）商店の店員。

ミッチェル（35）サンバを踊る「Bar ANIMAL」の店員。衣装に派手な色の孔雀の羽。（22）医大生。

ママ（60）「Bar ANIMAL」の経営者ヒョウ柄のタイトなワンピースを着ている。（47）サリ―と出会う。

サリ―（25）猫のコスプレをしている「Bar ANIMAL」の店員。（12）施設から逃げる。

太郎（11）大柄で横柄な翔太の同級生。翔太をいじめている。

ハルキ（21）翔太の美大の同級生。

ミサ（21）翔太の美大の同級生。

春子の母（78）商店の店主。ぎっくり腰で店を休む。

外国人観光客二名

国語の先生（30）

男子児童（11）

○ 海辺

照りつける日差し。人気のない海辺。

そこかしこに漂流物が落ちている。古ぼけたTシャツに短パン姿、ビーチサンダルで歩く日々野竜一（40）。ガラクタを拾っては大きなゴミ袋に入れていく。腰を伸ばして、水平線を遠い目で見つめる長髪で無精ひげの竜一。通りがかった散歩中の犬に吠えられる。ビビる竜一。

砂浜にガラクタの影が映っている。

タイトル「ガラクタを拾う男」

○ 小森家・外観・庭

海辺のガラクタの影から庭のひまわりの影に変わる。凝ったデザインの一軒家。「KOMORI」と彫られた表札。手入れされた庭からリビングが見える。

○ 同・リビング

洗練されたインテリア。棚には建築関

係の本や雑誌が並ぶ。一角にこの家の模型が飾られている。その横に家族写真の写真立てが幾つも置かれている。出かける支度をしているオーダーメードのスーツを着た小森大地(36)、ブランドのワンピースを着た麻衣(36)、小洒落たポロシャツに短パン姿の翔太(11)。2つの大きなスーツケースが置かれた周りを右往左往している大地と麻衣。ソファでゲームに興じる翔太。リュックを背負い、赤い帽子を被っている。

麻衣「ねえ、パスポート持った？」

大地「ああ、ちゃんとここに……。ってあれ？どこ置いたっけ」

麻衣「もう、いつもいつも、しっかりしてよ」

麻衣、リビングのテーブルに無造作に置かれたパスポートを取って大地に渡す。

麻衣「こんなところに。ほらっ」

大地「さんきゅ」

麻衣からパスポートを受け取るとスー
ツの懷に入れ、壁の時計を見る大地。

大地「そろそろ出ないと」

麻衣「わかってる。翔太、ほら、行くわよ」

なかなかゲームをやめない翔太。

麻衣「もう、翔太、やめなさい。置いて行く
わよ」

翔太「ちえっ、もうちょつとでベストスコア
だったのに」

ゲームをやめてソファから立ち上がる

翔太。

麻衣「ほら、早くしないと」

麻衣がせかすように翔太の背中を押し
ながら玄関に向かう3人。

○ 空港・外観

タクシーから降りる大地と麻衣と翔太。

空港の入口へ向かう。

○ 空港・ロビー

人々でごった返すロビーで竜一に翔太を紹介する麻衣。

麻衣「この子が翔太。小学5年生。夏休みの間、よろしくね。ほら、翔太、挨拶して」

翔太「…」

うつむく翔太。

麻衣「もう、何恥ずかしがってんの。お母さんのお兄さんで、あなたの伯父さんよ」

竜一「伯父さんといっても、初めましてでもんな。無理もないよ。伯父さんはずっとニューヨークに住んで、今年のはじめに日本に帰って来たんだ。日々野竜一っていうんだ。よろしくな」

翔太の頭をなでる竜一。

麻衣「兄さん、いきなりでごめんね」

竜一「香港のタワーのコンペで大地くんと麻衣の企画が選ばれたんだもんな。すごいよ。翔太の面倒は俺がしっかり見てやるから頑張ってこいよ」

麻衣「ありがとう。翔太、伯父さんの言うこときいていい子にしてるのよ」

大地「お義兄さん、暫くの間、よろしく願います。落ち着いたら連絡しますので」

竜一「ああ、気を付けて」

翔太を引き寄せる竜一。会釈して出発ゲートに向かいながら翔太に手を振る大地と麻衣。それを黙ったまま見送る翔太。

翔太に目線を会わせる竜一。

竜一「腹減ったろ。飯でも食いに行くか。ラーメンはどうだ、ここのラーメンうまいぞ」

翔太の肩を抱き歩き出す竜一。目を伏せたままの翔太。

○ 海辺（日替わり・朝）

波打ち際にガラクタが転がり、波に揺られている。ウミネコの鳴き声が響く。

○ 倉庫・事務所・居間（朝）

海のすぐそばにある古びた大きな倉庫

の一角に事務所。その奥に生活スペースがある。畳敷きの居間に布団を敷いて寝ている竜一と翔太。目を覚ます翔太。横でいびきをかく竜一。竜一の顔を見て、うんざりしたように起きだす翔太。

○ 同・台所（朝）

冷蔵庫を開ける翔太。ビールが数本とペットボトルの水しかない。水を取って飲む翔太。台所の棚をあさって食べ物を探す。かごに入ったしつけたせんべいをみつける。一口かじる翔太。

翔太「まずっ」

と言いながらとりあえず口に入れていく。

○ 同・居間（朝）

目を覚ます竜一。翔太を探す。台所にいる翔太を見つける。

竜一「起きてたのか。すまん、朝飯買い忘れた。コンビニ行くか」

○ 商店・外観（朝）

古びた商店の前まで歩いてくる竜一と
翔太。うつむいていた翔太、店を見て
眉間にしわを寄せる。

翔太「これのどこがコンビニ？」

竜一「食料品から生活雑貨まで何でも揃ってる。立派なコンビニだろ。夕方の5時までしかやってないけどな」

笑いながら翔太を店の中に促す竜一。

○ 商店（朝）

かごにパンを放り込む竜一。業務用冷蔵庫からジュースのペットボトルを取り出す翔太。

レジに立つ春子（56）、竜一のかごから商品をレジに通す。

竜一「あれ？いつものばあさんは？」

春子「ああ、お母さん、腰やっちゃって。うちで寝てる。もういい歳なんだから、店畳んじやえばって言ってるんだけどね。この辺も人がいなくなって、お客さんめつきり減っちゃったし」

買い物袋に商品を入れて竜一に渡す春子。軽く会釈して受け取る竜一。

竜一「そうは言っても、店がばあさんの生きがいなんだろう。それにここ畳まれたら俺が困る」

春子「だから私が代わりに来てるのよ。もつといっぱい買ってくれなきゃ、毎月赤字が膨らんで大変よ」

竜一「ひとり身の買い物なんて、知れてるさ。

まあ、今日からこいつがうちにしばらく住むからちよつとは売り上げに貢献できるぜ」

翔太の頭をつかんで、揺らす竜一。迷惑そうに竜一を見る翔太。

春子「あら、隠し子なんて聞いてなかったわ」

竜一「違うよ、妹の子ども。両親が仕事で海

外だから、夏休みの間、面倒見ることになったんだ」

春子「お名前は？」

かがんで翔太を見る春子。

翔太「…」

うつむく翔太。

竜一「こいつ、思春期で人見知りなんだ。翔太ってんだ。5年生。ほら、頭下げろ」

翔太の頭を無理やり下げさせる竜一。
仕方なく会釈する翔太。

春子「伯父さんに似なくて男前ね。よろしくね」

竜一「余計なお世話」

店を出る竜一と翔太。

○ 海辺

漂流物があちこちに散らばった海辺を
ゴミ袋を持った竜一と翔太が連なって
歩く。ガラクタを吟味する竜一。気に
入らないと放り投げる。そのガラクタ

を拾ってゴミ袋に入れる翔太。

翔太「伯父さん、ゴミ拾いしてるんじゃないの？」

竜一「ゴミ拾い？ お前にとっちゃ、こいつらはただのガラクタかもしれねえが、俺にとっちゃ、宝の山さ」

翔太「宝の山？ リサイクルショップにでも売るのが？ こんなガラクタ」

竜一「売れるわけねえだろ。こんなガラクタ」

翔太「さっきは宝の山だって言ってたくせに」

流木に腰掛ける竜一。その横に座る翔太。

竜一「まあ、そのうちわかるさ。腹減ったな。

昼飯どうするよ」

翔太「ラーメン食いたい」

竜一「ラーメンか、よっしゃ、まかせとき」

○ 倉庫・事務所・台所・居間

湯を沸かした鍋にインスタントラーメンを放り込む竜一。それを居間から見

ている翔太。ぼそつと独り言。

翔太「お店のラーメンが食べたかったのに」

竜一「ほら、できたできた。食ってみろ、うまいぞ」

卵を落としただけのラーメンを鍋のま
ま、居間のちゃぶ台に持ってくる竜一。
新聞紙の上にそれをのせる。お椀にラ
ーメンを取り分けて翔太に渡す竜一。
いやいや受け取り、食べる翔太。

竜一「どうだ、うまいだろ。ラーメンはこれ
が一番だ」

鍋の中から直接箸でラーメンを食べる
竜一。

○ 倉庫・外観

倉庫の中へ入っていくガラクタが詰ま
ったゴミ袋を持った竜一と翔太。

○ 同・内

拾って来たガラクタをブルーシート

敷かれた一角にぶちまける竜一。その中からつぶれた空き缶を拾って、別の一角に積み上げられたガラクタの上に慎重に置く。それを何度も繰り返している。少し離れた場所からそれを見ている翔太。眉間にしわをよせている。

翔太「あっちのガラクタをこっちのガラクタに移動させてるだけじゃん。伯父さん、なにしてんの？」

竜一「…」

作業に夢中で聞いてない竜一。倉庫を出る翔太。

○ 海辺

棒切れを持って、海辺をつまらなそうに歩く翔太。遠くからサンバの音楽が聞こえてくる。顔を上げて音楽が聞こえるほうを見る。そこには、🐦バックを履いて、背中と頭に孔雀の羽飾りをつけた大柄な男ミツチエル（32）が、

一心不乱にサンバを踊っている。すっぴんだ。

翔太「何だ？ あの人」

突風が吹き、頭の羽飾りが翔太のほうに飛んでくる。それを見ている翔太。

ミツチエル「ごめーん。その羽、とってくれない？」

翔太、恐る恐る、棒切れを使って羽飾りを拾う。そのまま、ミツチエルのほうへ持っていく。

ミツチエル「なに、うんこ拾ったような扱いしてるのよ。失礼ね。でも、ありがと」

棒切れから羽飾りを取ると、頭に着け、また踊りだすミツチエル。翔太、走って倉庫へ戻る。

○ 倉庫・内

慌てた様子で倉庫に駆け込む翔太。

翔太「伯父さーん、海辺に変な人がいるよ。怖かったー」

作業の手をとめて振り返る竜一。

竜一「どんな奴だった？」

翔太「お尻がプリツとしてて、羽飾り付けて、踊ってた。大きな男の人が」

竜一「ああ、ミツチエルか。心配いらない。いい奴だ」

再び作業する竜一。

翔太「ミツチエル？ あの人が？ どう見ても日本人だったけど」

竜一「あだ名もないなもんだ。俺も本名は知らねえ」

翔太「なんで踊ってるの？」

竜一「仕事だ。邪魔すんじゃねえぞ」

翔太「仕事？」

首をかしげてその場にへたり込む翔太。

○ 繁華街（夜）

きらびやかなネオン街。呼び込みの男や、酔っ払いに肩を抱かれて歩くドレスを纏った若い女などが歩いている。

○ Bar ANIMAL・外観（夜）

繁華街のはずれの寂しい通りにある古ぼけたビル。看板に「Bar ANIMAL」とある。重たい木の扉を開けて、竜一と翔太が入っていく。喧騒が漏れる。

○ 同・内（夜）

大きな音で音楽がガンガンなっている。カウンターとボックス席が3つほど、奥に小さなステージのある店内。間接照明のみでお客の顔ははっきりと見えない。カウンターに一人、ボックス席に中年カップルが一组、その向かいに猫のコスプレをして、猫耳を付け、キヤッツバリの濃いメイクをしたサリー（25）が座って接客をしている。

ヒョウ柄のタイトなワンピースにアイシャドウとまつげを強調したメイク、ボブのウィッグを被ったママ（60）が

カウンターの中でグラスを磨いている。

ママ「あら、竜ちゃん、久しぶりじゃない。

元気だったの？ 最近全然来てくれないから寂しかったわ」

竜一「よう、ママさん、そんなに来てなかったっけ。今日はちよつと、こいつを社会勉強に連れてきてやったのよ」

翔太の肩を抱いて、ママに見せる竜一。

ちらつとママの顔を見るがすぐ俯く翔太。

ママ「あらかわいい坊やじゃない。竜ちゃん、いつの間に？ 隅に置けないわね」

竜一「違う違う、俺の子じゃなくて、妹の子で夏休みの間、預かってんの。ほら、翔太、挨拶しろ」

翔太「…」

竜一「相変わらずだなあ、お前は。ごめんな、ママ、こいつ思春期で人見知りしてんだ」
ママ「そんな、いいのよ、幾つなの？」

翔太「じゅーいち…」

俯いたままボソツと答える翔太。

竜一「十一歳、小五だよ」

ママ「まあ、ティーンエイジャーね。そりゃ、
恥ずかしいわね、いきなりこんなとこ連れ
てこられて。さあ、座って、オレンジジュ
ースでいいかしら？」

スツールに座り、こくつとうなずく翔
太。

竜一「俺はビール」

その横に座る竜一。店内を見回す。

ママ「はいどうぞ」

翔太の前にオレンジジュースの入った
グラス、竜一の前にグラスと瓶ビール
を置くママ。栓抜きでシュポツと栓を
抜く。

照明が落ちて、ステージにスポットラ
イトが点く。音楽がサンバに変わる。
中年カップルがひゅーひゅーと叫んで
いる。

ステージの下手からサンバの衣装に身

を包んだミツチエルが踊りながら出てくる。孔雀の羽飾りを付けている。舞台映えするメイク。盛り上がる中年カップル。それを見て驚く翔太。

翔太「伯父さん、あの人」

ミツチエルを指さす翔太。

竜一「そうだ、ミツチエルだ。驚いたか？」
一心不乱に踊るミツチエル。それを食い入るように見ている翔太。

×××

踊り終えて、竜一の横に座るミツチエル。頭の羽飾りを外してカウンターに置く。ママがその横にグラスを置く。

竜一「お疲れさん、まあ一杯飲めや」

ミツチエルにグラスを持たせ、ビールを注ぐ竜一。

それを少し上に掲げ、一気に飲み干すミツチエル。

ミツチエル「ああ、竜ちゃんの入れてくれた
お酒、格別に美味しいわ、生き返った」

翔太がいることに気づくミツチエル。

ミツチエル「あら、昼間の失礼なガキじゃない。
い。なんでこんなところにいんの？」

眉間にしわを寄せ、目をそらす翔太。

竜一「こいつは俺の甥っ子で翔太ってんだ。
なんだ、失礼なガキって。なんかしたのか
こいつ」

ミツチエル「私が風で飛ばした羽飾りを棒っ
きれで拾って渡すのよ。まるでうんこ触る
みたいに」

竜一「ははは、なんだ、そんなことか。怖か
ったんだよな。昼間の海辺であんなかつこ
で踊ってたら誰でも不審がるって」

ミツチエル「それにしても、棒っきれで拾う
ことはないじゃない。これでも立派な商売
道具なのよ」

羽飾りを大事そうになでるミツチエル。
申し訳なさそうにもじもじしている翔

太。

翔太「ごめんなさい：」

小さな声でぼそっとつぶやく翔太。

竜一「ほら、翔太も謝ってることだし、許してやってくれよ」

ミツチエル「ま、かわいいから許すわ。伯父さんに似なくてよかったわね」

竜一「だからなんなんだ、どいつもこいつも。俺だって髭剃って、散髪すりゃ、こいつの何倍も男前だったっうの」

ミツチエル「まあまあ、子供相手に張り合わないの。私は好きよ、竜ちゃんの無精ひげ」

竜一の髭をなでるミツチエル。

竜一「やめろ、なぐさめはいらねえ」

ミツチエルの手を振り払う竜一。しつこく撫でまわすミツチエル。それを横目でちらちらと見ている翔太。

○ 海辺（日替わり）

ガラクタを吟味する竜一。竜一が投げ

たガラクタを拾う翔太。

その横を外国人の二人連れが通りかかる。竜一の顔を見て驚く外国人の一人。英語でまくしたてるように竜一に話しかける。それを怪訝そうに見ている翔太。

竜一と握手をして、スマホで写真を撮ると会釈して去っていく外国人。いつまでも手を振っている。

翔太「伯父さん、知り合いなの？」

竜一「いや、知らねえ。なんかどつかのお笑い芸人にでも間違えられたみてえだな」

再び、ガラクタを吟味しながら歩き出す竜一。首をかしげながら、外国人のほうを見て歩き出す翔太。

○ 倉庫・事務所・居間（夕）

窓から夕陽が差している。鳥の鳴き声。居間で折り重なるようにして眠る竜一と翔太。

○ Bar ANIMAL (夜)

ボックス席に竜一と翔太、その向かいに猫のコスプレをしたサリーが座っている。

竜一のグラスにビールを注ぐサリー。

サリー「竜ちゃん、いらっしやい。翔太ちゃんも、オレンジジュースどうぞ」

翔太の前にオレンジジュースを置くサリー。

翔太「ありがとうございます…」

上目遣いにサリーをちらちら見ながら、ボソッとつぶやく翔太。

竜一「サリー、今日はこいつに人生のなんたるかを教えてやってくれ。こいつは坊ちゃん育ちで挨拶もろくにできねえ。サリーの苦労話でも聞けば、ちよつとはましになるんじゃないか？」

翔太の頭をつかんで揺らす竜一。

竜一「翔太、サリーは若いけど、随分と苦労

してるんだ、なあ」

サリーを見る竜一。少し照れたような顔を
するサリー。

サリー「あたしはね、5歳のときに親に捨てられてね。施設をいくつも転々としたの。その頃のあたしは手の付けられない悪ガキでね。でも、それには理由があった。あたしはね、体は男に生まれたけれど、心は女の子だったのよ。そのことを誰にも分ってもらえなくて、男の子の物を押し付けられるたびに、暴れて泣いたわ。でもそれはただのわがままとしか受け止められなかった。だから両親もあたしを見捨てたの。あたし、絶望しちゃってね、あるとき施設から逃げ出したの」

○ 回想・繁華街（夜）

テロップ・十三年前

繁華街の雑踏の中をはだしで走る古ぼ

けたワンピースを着たサリー（12）。

○ 回想・Bar ANIMAL・勝手口（夜）

勝手口の横で疲れてへたりこむサリー。
そこへゴミ出しのために出てきたママ

（47）がサリーに気づく。

ママ「あら、こんなところに子供が一人でどうしたの？ 家出でもしたの？」

サリー「はあ、はあ」

真っ赤な顔で息を弾ませるサリー。額
に手を当てるママ。

ママ「あらやだ、すごい熱じゃない。立てる？」

サリーを抱えて、勝手口から店に入る
ママ。

○ 回想・Bar ANIMAL（夜）

ボックス席に寝かされブランケットを
かけられたサリー。額に濡れたおしぼ
りが置かれている。

ママ「困ったわね。この時間じゃ病院も開い

てないし」

ドアベルが鳴り、すつぴんのミツチエル（22）が入ってくる。

ミツチエル「ママいる？ あたし、忘れ物しちゃって」

ママ「ミツチエル、ちょうどよかったわ、あなた医大生でしょ、この子診てあげて」

懷中電灯を使つて、サリーの臉を開いて診たり、口を開けて喉を覗き込むミツチエル。

ミツチエル「ママ、保冷剤ある？ 脇を冷やしてあげて。それと飲めそうならお水に砂糖とお塩入れて飲ませてあげて」

一晩中、サリーの看病をする二人。

○ 回想・同・日替わり（朝）

新聞配達バイクの音が店の外から聴こえてくる。

目を覚ますサリー。そのそばで、テーブルにうつ伏して寝ているママとミツ

チエル。ママが目覚めます。

ママ「あらやだ、寝ちゃってたわ。ねえ、あなた、具合はどう？」

サリーの額に手を当てるママ。

ママ「よかった。熱は下がったみたいね。おなかすいたでしょ。おかゆ作ってあげる」

カウンターに行き、鍋に米を入れて研ぐママ。

ミツチエルも目を覚めます。

ミツチエル「え？ もう朝なの？ あなた、大丈夫？」

うなづくサリー。

ミツチエル「はあ、よかった。忘れ物取りに店に戻ったら、あなたが熱出して寝てるんですもの。びっくりしたわ。でも、お熱下がったみたいでほんとよかったわ。あなた、お名前は？ どこから来たの？ 私はミツチエル、あの人はこのママさんよ」

サリー「…」

ミツチエル「まあ、口がきけないのかしら。

じゃあ、私が名前つけてあげる。あなた、サリーね。サリーはね、私が昔飼ってた猫の名前。あなた、どことなく猫っぽいから。ママ、いいでしょ、この子、サリーで」

ママ「そうは言っても、ご両親、捜してるんじゃないの？ おかゆ食べたら警察行きましょ」

激しく首を横に振るサリー。

サリー「連れてかないで。警察。いやだ。連れてかないで」

泣きながら抵抗するサリー。それをなだめるミツチエル。

ミツチエル「口、きけるじゃない。わかったわ。警察には行かないから。落ち着いたら、話してくれるわね」

こくんとうなずくサリー。ママがおかゆを運んでくる。それをむさぼるように食べるサリー。

×××

ママ「それじゃ、あなた、施設が嫌で逃げ出してきたの？」

うなずくサリー。

ママ「あなたも私たちと同じなのね。誰にも理解されず、ここに来たのは何かの運命かもしれないわね」

ミツチエル「でも、どうするの？ ママが面倒見るの？」

ママ「そうね、施設に戻したところで、理解者がいないんじゃない、また逃げ出しちゃうだろうし。とりあえず、施設には連絡してうちで保護してることは言っておかないと。私達、あなたを誘拐したことになるっちゃうもの」

サリー「そしたら、施設に連れ戻されちゃう。そんなの嫌だ。あたしのことなんて、誰も心配なんてしてない。このまま、行方知れずでいさせて」

○ 現在・Bar ANIMAL（夜）

空のグラスを持ったまま見つめるサリー。神妙な顔で俯いている竜一と翔太。

サリー「あたしはね、この店に命を救ってもらったの。あのあと、ちゃんと施設に連絡してくれて、ママが信用できる人だって証明するのはなかなか大変だったみたいけど。独り身だったママがあたしの面倒見てくれてね。短大まで出してくれた」

カウンターの時からカウンター席へ移動してくるママ。

ママ「私ね、結婚も子供もあきらめて、独りで生きてくって決めてた。でもあの日、この子がうちに来てくれた時、ああ、神様が私にご褒美を与えてくださったんだって思ったの。天涯孤独だった私に家族を授けてくださるなんて、こんなうれしい事ってなかったわ」

サリー「ママにそんな風に思ってもらえて、あたしはすごくラッキーだわ。あたしには

夢があってね、保姆さんになること。もし、あたしのような子供がいたら、あたしが大人の理解者になってあげられると思ったの。短大で保育士の資格取って、就活したんだけどなかなか受け入れてもらえなくて。今もこの店で働きながら、就活してる。でもね、あたしはここが大好きなの。もちろん、ママもミツチエルさんもね」

微笑むサリー。そんなサリーを微笑みながら見つめるママとミツチエル。

竜一「そうか、夢か。いい保育園に行けるといいな。ところでミツチエルは医大生だったんだろ。なんでサンバなんか踊ってるんだ？」

カウンターで三人を見ていたミツチエルがワインを揺らして一口飲む。

ミツチエル「サンバなんかって、言わないで。サンバは私の生きがいなんだから。医大はちゃんと卒業して医師免許も持ってるわよ。私が医者になろうって思ったのは、自分が

このちぐはぐな体と心でお医者さんに行くのがすごく嫌だったから。私みたいな医者がいれば、気兼ねなく診てもらえるでしょ。ここで働きながら、具合の悪い子がいれば無償で診てるの。もちろん、重い病気の子はちゃんとした病院に紹介してるけどね。それも、私が信頼するお医者さんのところって決めてるの」

竜一「ミツチエルにそんな志があったなんて、ちつとも知らなかったなあ。ただのサンバ狂いかと思ってたよ」

ミツチエル「サンバはね、何もかも忘れさせてくれるのよ。踊っていると、すべてのことがどうでもよくなっちゃうの。悩みなんてみんな吹っ飛んじゃうわ。私はサンバを踊ってる時が一番、私らしくいられるのよ」

竜一「翔太、どうだ、こいつらの話聞いて、お前には夢はないのか？ 志は？ 少しは考えてみろ」

翔太「…」

俯く翔太。

○ 海辺・日替わり

ガラクタを拾いながら歩く竜一と翔太。

○ 倉庫・事務所・居間・日替わり（夕）

昼寝をする竜一と翔太。

○ Bar ANIMAL・日替わり（夜）

サンバを踊るミツチエルを手拍子しながら見ている竜一と翔太とサリー。カウスターにママ。

○ 倉庫・事務所・居間・日替わり

ちゃぶ台に突っ伏して寝ている翔太。

その手もとには書きかけの絵日記が置かれている。買い物から戻ってきた竜

一、翔太の絵日記を取り上げて読む。

竜一「お、絵日記か、懐かしいな。なにになに？

今日は夜の動物園に行きました：」

翔太M「夜の動物園には、ヒョウと猫と、孔雀がいました」

○ 回想・Bar ANIMAL（夜）

楽しそうに働くママとミッチェルとサリー。

翔太M「ヒョウは少し歳を取っていますが、孔雀と猫をとてもかわいがっていて、いつも楽しそうです。猫は子供の時に親からはぐれてしまったそうですが、今は新しい家族と楽しく暮らしています。そして孔雀はいつもとても楽しそうにダンスを踊っています。僕はそんな夜の動物園が大好きです」

○ 現在・倉庫・事務所・居間

絵日記を読みながら涙する竜一。

竜一「これ、あいつらにも読ませてやりてえなあ」

○ 海辺・日替わり（夕）

クラゲがゆらゆらと揺られている。
夕日と鱗雲が夏の終わりを告げている。

○ 倉庫・事務所・居間・日替わり（朝）

ゴミ袋を持ってでかけようとする竜一。
布団をかぶったままの翔太。

竜一「おい、翔太、行かねえのか？」

翔太「…」

翔太を心配しながらも事務所を出る竜一。

竜一「どうしたんだ、あいつ、最近全然元気ねえな」

○ 同・（夕）

夕方になって、事務所に戻る竜一。新しい物袋を居間のちゃぶ台の上に置く。
布団を被ったまま身じろぎもしない翔太。

竜一、布団を剥ぐ。

竜一「どうした、翔太。具合でも悪いのか。

病院行くか？」

頭を横に振る翔太。

翔太「どこも悪くない」

竜一「じゃあ、なんで元気ないんだ。なんか

あつたか？」

翔太「夏休み終わっても、伯父さん家、いちやだめ？」

竜一「そりゃ、俺はいつまでも居てくれて構わないけど、お前、学校あるだろ。麻衣たちも帰ってくるし」

翔太「学校、行きたくない」

竜一「どうして？」

翔太「…いじめられてるから」

三角座りをしてうつ伏す翔太。

竜一「いじめって、麻衣は知ってるのか？」

首を横に振る翔太。

翔太「お母さん達には言えないよ。仕事で忙しいのに、僕のことまで心配かけたくない」

竜一「子供は親に心配かけてなんぼだぞ。知

らないほうがショックだぞ」

翔太「…」

竜一「なんでいじめられてるんだ」

翔太「わかんない。クラスに体の大きい乱暴な奴がいて、いつも僕ばかりいじめてくるんだ」

○ 回想・小学校・廊下

廊下を歩く翔太。そこへ、後ろから翔

太にぶつかってくる大柄な太郎（二）。

こける翔太。

太郎「どけよ、邪魔なんだよ。お前みたいなよわっちい奴は端っこ歩け」

笑いながら去る太郎。うんざりした様

子の翔太。

○ 現在・倉庫・事務所・居間（夕）

竜一「ちよつと、外出るか」

事務所を出る竜一と翔太。

○ 海辺（夕）

漂流物が散らばる海辺。

流木に座り、夕日を眺める竜一と翔太。

竜一「翔太、このガラクタたちを見ろ。こいつらは自分のことをはなからガラクタだとは思ってねえ。どれもこれも、皆、人様の役に立ってきたんだ。それをガラクタにしちまったのは人間だ。俺はそんなガラクタに再び息を吹き込んでやるのが仕事だ。人間もまたしかりだ。自分をガラクタだと思ってるやつはガラクタでしかねえ。だから周りからもガラクタ扱いされる。お前はどうだ、自分のこと、ガラクタだと思ってねえか。いじめっ子に自分はガラクタじゃねえって言えねえのか？」

ハッとした顔で目を見開く翔太。

翔太「…。伯父さん、夏休みの宿題、一つ残ってるんだけど、手伝ってくれる？」

竜一「何するんだ？」

翔太「伯父さんと同じこと」

○ 倉庫（日替わり）

四角い箱の中に、ガラクタを積んでいく翔太。それに横からアドバイスする竜一。二人に照明が当たっている。

○ 海辺（夕）

水面に浮かぶクラゲ。空には羊雲が夕日に照らされている。

○ 空港・ロビー（日替わり）

大地と麻衣の到着を待つ竜一と翔太。人混みの中から大地と麻衣の姿が見える。手を振る翔太。スーツケースとたくさんの土産物を積んだカートを押して近づいてくる大地と麻衣。

麻衣「ただいまー、翔太、兄さん。翔太、いい子にしてた？」

翔太「うん」

大地「お義兄さん、長い間、お世話になりま

した。これお土産です」

会釈してお土産を渡す大地。それを受け取り頭をかく竜一。

竜一「あんま、たいしたことはしてやってねえんだ。気にすんな」

麻衣「兄さん、晩御飯、御馳走するわ。どこがいい？」

竜一「いや、俺、用事あるから。…翔太、元気でな。またいつでも遊びに来いよ」

翔太「おじちゃん、ありがとう。おじちゃんも元気でね」

手を振ってその場を去る大地と麻衣と翔太。いつまでも手を振る竜一。三人が見えなくなると、後ろを向いて、涙をこらえている。

竜一「こんな姿、麻衣にはみせらんねえよ」
涙をぬぐう竜一。

○ 小森家・日替わり・外観（朝）

枯れたひまわりが種をこぼしている庭。

雨が降っている。

○ 同・ダイニング（朝）

二階から降りてきた翔太。ポロシャツに短パン姿。ランドセルを背負っている。手には竜一と作った工作。

朝ごはんの片づけをする麻衣。ダイニングテーブルでコーヒーを飲みながら新聞を読む大地。

麻衣「翔太、雨が降ってるけど大丈夫？ そんな工作持って」

翔太「大丈夫、濡れないように気をつけるから。行ってきたーす」

大地・麻衣「いってらっしゃい」

玄関へ向かう翔太。

○ 歩道（朝）

差した傘を肩と顎ではさみ、工作を両手に持ち歩く翔太。

○ 小学校・廊下（朝）

工作を持って教室に向かう翔太。そこ

へ太郎（二）が通りかかる。

太郎「おい、なんだよそれ」

翔太「…象だ」

太郎「象？　どこが象なんだよ。ただのガラクタじゃねえか。こんなもの」

翔太から工作を取り上げると、床に叩きつける太郎。

翔太「やめろよ。なにすんだよ」

太郎「どうせ、ガラクタなんだ。どうなったっていいだろ」

駆け足で逃げる太郎。散らばった工作を拾う翔太。児童たちが周りで見ているが誰も助けない。

窓ガラスを雨が打ち付ける。

○ 小学校・教室（夕）

雨の音が響く教室。翔太が一人、泣きながら工作を直している。

○ 小森家・ダイニング（夜）

晩御飯の食卓を囲む大地と麻衣と翔太。

あまり箸が進んでいない翔太。それを

心配そうに見ている麻衣。

麻衣「今日どうだった？ 久々の学校は」

翔太「別に」

麻衣「別について、どうしたの？ 元気ないじ

やない」

翔太「なんでもない。ごちそうさま」

箸を置いて、二階に行く翔太。食べか

けのままの晩御飯。

麻衣「ちよつと待って、翔太！」

立ち上がるがしょんぼりして再び座る

麻衣。箸を持ったまま手を止め、心配

そうに見ている大地。

○ 同・二階・翔太の部屋（夜）

学習机、本棚、洋服ダンス、ベッドの
置かれた六畳ほどの部屋。本棚には漫

画、ミニカーが幾つも飾られている。
机にうつ伏している翔太。思いついた
ように顔を上げ、引き出しから海辺で
竜一と並んで撮った写真を出して眺め
る。

×××

○ 回想・海辺（夕）

漂流物が散らばる海辺。

流木に座り、夕日を眺める竜一と翔太。

竜一「翔太、このガラクタたちを見ろ。こいつらは自分のことをはなからガラクタだとは思ってねえ。どれもこれも、皆、人様の役に立ってきたんだ。それをガラクタにしちまったのは人間だ。俺はそんなガラクタに再び息を吹き込んでやるのが仕事だ。人間もまたしかりだ。自分をガラクタだと思ってるやつはガラクタでしかねえ。だから周りからもガラクタ扱いされる。お前はど

うだ、自分のこと、ガラクタだと思ってね
えか。いじめっ子に自分はガラクタじゃね
えって言えねえのか？」

×××

いつまでも、写真を眺める翔太。

○

小学校・廊下・日替わり

筆箱とノートを持って歩く翔太。そこ
へわざとぶつかって筆箱とノートを落
とす太郎とその取り巻き二人。笑いな
がら去っていく。

ため息をついて拾う翔太。

窓の外は雨。

○

同・教室

国語の授業をしている先生(30)。黒板
に文字を書いている。それをノートに
写す児童たち。翔太もノートにそれを
書いている。

○ 同・校庭・花壇

曇っていた空に光が差し、だんだん空が晴れていく。雨がやみ、花壇の葉っぱからしずくが垂れている。

○ 同・教室

窓が次第に明るくなり、雲から太陽が現れる。教室の中に太陽の日差しが入ってくる。

黒板の文字を消しだす先生。

男子児童「あ、まだ書いてないのに」

後ろの児童のノートを見ようと振り返った、男子児童（二二）、後ろの黒板を見て驚きの表情。立ち上がって指をさす。

男子児童「おい、みんな、あれ見ろよ。象だ」

一斉に後ろの黒板を見る児童たち。

後ろの黒板には翔太の工作が太陽の日差しに照らされて、くつきりと、象の形をした影が映っている。感嘆の声を

あげる児童たち。

児童たち「ほんとだ、象だ象だ。すごいよ、

翔太」

晴れやかな顔をする翔太。それを見て
頭を掻いてもじもじしている太郎。太
郎、立ち上がって翔太のところへ行く。

太郎「翔太、工作、壊してごめん。あれ、ほ
んとに象だったんだな」

翔太「そうだよ。象は仲間想いのいいやつな
んだ。だから太郎も象みたいに仲間想いに
なってほしい」

太郎「俺、お前が何も言い返してこないから
いい気になった。なんか変わったな、翔
太」

微笑みあう翔太と太郎。

○ 倉庫

真っ暗な倉庫の中に、人々が集まって
いる。その中には春子や、車いすに座
った春子の母(78)、ママとミツチエル

とサリーもいる。海辺で話しかけた外国人の姿も。

いくつも置かれた照明のスイッチをオンにしていく竜一。倉庫の壁に次々と、動物の影が映し出されていく。感嘆の声を上げるギャラリー。

ママとミツチエルとサリーが竜一のそばに駆け寄る。

ママ「すごいわ、竜ちゃん、いつの間にこんなすごいもの作ってたの？」

ミツチエル「ほんと、海辺でゴミ拾いばかりしてたのは、こういうことだったのね」

サリー「そういえば、竜ちゃんの職業って聞いたことなかったわね。ニューヨークでは名の知れた現代美術家だったなんて。なんでもっと早く教えてくれなかったの？」

竜一「いやあ、皆を驚かせたくて。なんせ、現代美術家なんて、なんだか気取ってるだろ。言ったら気軽に酒、飲めなくなりそうだし」

ママ「ぼさぼさ頭の無精ひげで、きつたない
恰好して。それでよくお酒飲むお金あるな
あつて思ってたのよ」

ミツチエル「私もてつきり、ガラクタを売っ
て稼ぐおじさんだとばかり思ってたわ」

竜一「ま、別にそれも間違っではないけどな」
ミツチエル「やだ、まあ、ほんとだわ」

笑いあう四人。竜一のもとに次々と人
が集まってくる。

○ 空港・ロビー・日替わり

散髪をして無精ひげを剃ってさっぱり
とした身なりの竜一、大きなスーツケ
ースや荷物をカートに積んで立ってい
る。その前に、大地と麻衣と翔太。

麻衣「兄さん、またニューヨークに戻るだ
なんて、寂しいわ」

大地「あちらでもお元気で」

竜一「お前らも、元気でな。翔太、お前なん
か、明るくなつたな」

翔太「うん、伯父さんのおかげだよ。僕、もう自分のことをガラクタだと思わない。僕、やりたかった」

竜一「そうなのか？　なんだ」

翔太「秘密だよ。まあ、そのうちわかるさ」

竜一「俺の真似してんじゃねえ。生意気な。」

翔太の頭をつかんで揺らす竜一。

笑顔の翔太。

手を振って搭乗口へ去っていく竜一。

翔太「伯父さん、またねー！」

大きく手を振って竜一を見送る三人。

○ 美術大学・外観

テロップ・十年後

「○○美術大学」の外観。

キャンパス内の木に蝉が止まっている。

蝉の鳴き声が聞こえる。

○ 同・デッサン室

真ん中に裸像の彫刻が置かれている。

それを取り囲むように学生たちが座り、キャンパスにデッサンしている。

その中でわき目も振らずデッサンをする翔太（21）。

○ 同・食堂

食堂でランチを食べている翔太。そこへ、同級生のハルキ（21）とミサ（21）がランチをのせたトレイを持ってやってくる。翔太を囲むように座る二人。

ハルキ「おい、翔太、すごいじゃん、お前の作品、SNSでバズってるじゃんか」

ミサ「あの、影で有名人の顔作るやつ、あれってどうなってんの？ 私も真似してみたけど、全然あんな風に綺麗に作れないよ」

翔太「ああ、あれはちよつとしたコツがいるんだ。昔、伯父さんに教えてもらったんだ。企業秘密だけどね」

ハルキ「ニューヨークで有名な現代美術家の伯父さんだろ。いいよなあ。身内に有名人

が
い
る
っ
て」

ミサ「私達も有名人の友達じゃん、もはや」

翔太「そんな、有名人なんて、ちよつとバズ
ったくらいで」

ハルキ「また、謙遜なんかして。やっぱ、行
くのか？ ニューヨーク」

翔太「ああ、交換留学で秋に発つよ」

ミサ「ええ？ 秋ってもうすぐじゃん。寂し
くなるなあ」

ハルキ「ミサ、翔太のこと好きだもんな」

ミサ「ちよつと、それは言わない約束でしょ。

冗談だからね、信じないでね、翔太」

翔太「ごめん。ミサ、俺好きな奴いるんだ」

ハルキを見る翔太。

ハルキ「え？ 何？ そうなの？」

驚いた顔で二人の顔を順番に見るハル
キ。シヨックを受けるミサ。笑う翔太。

○ 空港・ロビー（日替わり）

スーツケースと画材の入ったトランク

を両脇に置いた翔太の前に号泣するミサと、それをなだめるように肩を抱くハルキが立っている。

ハルキ「翔太、ミサのことは俺に任せて、留学生活、エンジョイしてこいよ」

ミサ「翔太ー、（なんでハルキなのよー）、ズズッ」

泣き声で何を言ってるかわからないミサ。

翔太「お前らも元気だな。一年なんてあっという間さ。」

手を振って搭乗口へ向かう翔太。手を振るハルキ。泣きながら翔太を見つめるミサ。

エンドロール

○ 保育所

保育士として働くサリーの姿。すっぴん、ロングヘアを一つにまとめ、エプ

ロンを着ている。男の子と人形遊びをするサリー。楽しそうに笑っている。

○ スマホの画面

ユーチューバーをしているハルキとミサ。自分たちの作品を紹介している。

○ 香港のタワー

建設現場でヘルメットをかぶり、指示する大地と麻衣。

エンドロール終

○ Bar ANIMAL (夜)

テロップ・一年後。

サンバの音楽が流れる店内。ステージには照明が当たっている。手拍子をするママとサリーと竜一。他に観客が数名。ステージに現れる大きな羽を背負ったミツチエルと、翔太。激しく腰を

振って踊る二人。店の入り口から駆け込んでくるハルキとミサ。口を開けて、翔太を見ている。

竜一「翔太のやりたいことって、こっちかよ」
ビールを一口飲む竜一。楽しそうに踊る翔太。

完